

モチベーションファクター対談

公開日 2024 年 4 月 13 日

周囲を巻き込み「自分が一番初めに知る」ことを実現する 起業を目指す Li 系二次電池の研究者のモチベーションファクター

学生やビジネスパーソンのモチベーションレベルが、年々低下しているのではないかと思います。起業家志向の学生が減少している、管理職になりたくない若手社員が増えている・・・10 年来大学院で授業する中で、実感しています。そのような中、Li 系二次電池の研究者として活躍し、起業の計画をまさに練っている、横浜国立大学大学院の須藤拓さんと対談させていただきます。

対談者（敬称略）

横浜国立大学理工学府 化学・生命系理工学専攻 上野研究室 博士課程 2 年 須藤 拓	モチベーションファクター株式会社 代表取締役 山口 博
--	--------------------------------

プロフィール

須藤 拓（すどう たく）

横浜国立大学理工学府 化学・生命系理工学専攻 上野研究室
博士課程 2 年。日本学術振興会特別研究員（DC1）。卓越大学院
PEP プログラム TD4。NEDO-Front-Runner (FR)。電気化学会
優秀学生講演賞、イオン液体討論会 Chemical Communication 賞
受賞。

趣味はバレーボールやボルダリング、国内外を問わない旅行
等、面白そうと思ったらとりあえずやってみる。



モチベーションファクター株式会社

代表取締役 山口 博（やまぐち ひろし）

モチベーションファクター®（意欲を高める要素）を根にした分解スキル反復演習®型能力
開発プログラムの普及に務める。国内外金融、IT、製造企業の人材開発部長、人事部長、
PwC/KPMG コンサルティング各ディレクターを経て現職。横浜国立大学大学院非常勤講師
「グローバルスタンダードの次世代ビジネススキル」講座担当。

(山口)

須藤さんには、私が横浜国立大学大学院で実施している「グローバルスタンダードの次世代ビジネススキル」講座を履修いただきました。理屈や理論の解説を行わず、ひたすら動作と話法の発揮力を高める演習プログラムですが、極めて高いスキルを発揮していただきました。

(須藤)

結論から申し上げれば、山口先生の講座は「非常に効果的である」と思っています。研究者の卵として理論をないがしろにする気は全くないのですが、人間には感情があるので理屈だけでは納得できないことって多々あると思うんですね。

(山口)

頭でわかっているのに、実践できないので、どうすればよいか、という相談を受けることが、よくあります。

(須藤)

「正しいことを言ってるんだけど、言い方が嫌で従いたくない」みたいな。その点山口先生の講座では、ひたすら実践なので、やってみて、効果を実感するので、「これすごいな」って思いました。その実感もあり、結果として能動的にスキルが身についていったとおもいます。

(山口)

さまざまな企業の各層の方々と演習プログラムを実施し、演習で発揮されたスキルを数値化して提供し、さらなる能力開発に役立てていただいています。須藤さんは、スキル、成長性、迅速性が極めて高く、能動性、迅速性に加えて、正確性も極めて高く、すばらしい発揮力で演習をリードしてくださいましたね。



(須藤)

過分な評価ありがとうございます。成長性や迅速性が高いという評価は自身の感覚と一致しています。ゲームというレベル上げのような自分の能力を高めていくことはもともと好きでしたし、「悩む時間があったくない。失敗してもいいからまずやってみよう」と普段から心がけているので、ここらへんの思考が成長性や能動性、迅速性といったところに反映されているのだと思います。

(山口)

意外な点はありましたか？

(須藤)

逆に正確性が高かったのは意外でした。いずれにしても単に感覚的ではなく数値で自分の能力を見つめなおすことは自分のストロングポイントの再確認と、改善すべき点の把握につながり、さらなる自身のスキルアップに有効活用させていただいています。数字はうそをつかないです。笑

高いモチベーションで仲間をエンカレッジして巻き込む

(山口)

須藤さんの、これまでのどのような経験や訓練機会が、高いスキル発揮に役立っていますか。

(須藤)

今回の高いスキル発揮の根底にあるのは、自分がリーダーシップを発揮して、仲間たちを巻き込んで物事をなしたいという意味かなと思っているのですが、どうしてこのような考えを持ったかという、自分一人ですることには限りがあるということを知っているからかと思います。

(山口)

職位が上がれば上がるほど、活躍するフィールドが広くなればなるほど、そう思います。

(須藤)

例えば研究をしていても、いろんなことが気になるので全部やりたいんですけど、そんな時間はもちろんなくて、けれども物事の中心にいたいというか。そこでどうしたらいいかと考えた結果、仲間たちをエンカレッジする、巻き込んでいく能力が必要だなと。そういう意味では目的意識をはっきりとをもって取り組んだことが要因かもしれません。

(山口)

なるほど、それは私の捉え方で言えば、周囲を巻き込む高いモチベーションがそうさせたと

いうわけですね。私はかねがね気になっていることがありまして、横浜国立大学の学生の方々に限らず、さまざまな大学の学生や、企業のビジネスパーソンの、モチベーションレベルが下がり、上昇志向が低下しているのではないかと思います。

（須藤）

様々な考え方があるとは思いますが、将来への不安が関係しているのかなと思っています。私自身の考えでは、上昇志向の対義語は現状維持や安定志向だと思うのですが、上がり続ける税金や社会保障費、老後の年金問題に対し、成り上がってやろうという気持ちよりも、しっかり地盤を固めようといった気持ちが強くなっているのではないかと思います（とても大切なことです）。

（山口）

そうした側面は、確かにありますね。

（須藤）

チャレンジ（上昇）する時には失敗のリスクが付きまとうと思います（失敗する可能性がないのであればチャレンジではないと思います）。そしてそのリスクを許容することをよしとしない人が大多数となっている。

基本的には周りに倣っているとみんな一緒だから安心すると思いますし、わざわざ人と違うことをして安定から遠ざかる行為を選択する人が少なくなるのは当然のことと思います。



目標達成、自律裁量のモチベーションファクターを体現して生きる

(山口)

そのような中で、須藤さんは、Li 系二次電池材料の研究で活躍され、学会賞を受賞され、NEDO Entrepreneurs Program の2024 年度開拓コースのメンバー(NEDO-Front-Runner)にも選抜されています。他の学生の方々と、須藤さんとの違いはどこにあるのでしょうか。



(須藤)

自分の「知りたい、やってみたい」という気持ちを優先してリスクを許容している点がほかの人とは違うんだろうと思います。もちろん失敗したいわけではないので、リスクを小さくするためにしっかりと準備をしたり、計算をしたりしてはいますが。笑

(山口)

自分のモチベーションファクター（意欲を高める要素）に素直に従っているのですね。

(須藤)

そういうことになります。加えていえば、人とは違うというのは僕にとっては一つの指標になります。ほかの人がやっていないということは、まだ誰も知らない何かがそこにはあるかもしれない。そしたら僕が、それを知りたい。

(山口)

目標達成、自律裁量のモチベーションファクターが高いということですね。

(須藤)

やはり山口先生の授業の診断結果と一致していますね。笑 僕自身は誰かの体験談では満足できない、自分で体験したい。そのためなら、夜遅くまで研究してもかまわないし、修了がほかの人より3年遅れてもかまわないし、別にきつくてもいいと思っています。きついことや社会進出が遅れることは一般的にはリスクなのかもしれませんが、そういったものを気にしなくても生きてられる図太さみたいなものは持っていると思います。

(山口)

何がきっかけで、そう思うようになったのですか。それがわかれば、そのような機会を提供していければ、世の中の人々の自律裁量は一段高まるように思えてなりません。

(須藤)

小学校時代は「何故?」と思ったら自分が納得するまで先生や親を質問攻めしていた記憶があります。授業の時間は僕一人の時間ではないわけですから周りの同級生からは疎ましく思われていたと思いますし、結果いじめの対象になっていました。そんな中でも常に味方でいてくれた母と、「他人と違っていてもいい。君は魔法使いになれる(人よりすごい人物になれるといった意味だったかと思います)」と言葉をかけてくれた小学5年生の時の担任の先生がいてくれたことが僕にとっては幸運だったと思います。

(山口)

「他人と違っていてもいい。モチベーションファクターに素直に従えばよい」と私には聞こえました。

(須藤)

いじめられるのは嫌だったので人付き合いも上手くやろうと思うようになりましたが、いまでも自分の芯を曲げずにすんでいるのはこの優しい言葉のおかげだと思います。現に「僕は研究をするんだ」と決めたのは小学5年生の時で、子供ながらに描いていた研究生活をおくるところまで何とかやってきました。この出来事は僕が望んで得た機会ではないのでお答えになっていないかとは思いますが、親御さんはいつでも子供の味方でいてほしいと思いますし、僕が出会うことができたような先生と学生が出会うことは重要だと思います。

(山口)

味方でいるということは、その人のモチベーションファクターを尊重することだと私は思います。これからも存分に自律裁量を発揮され、高いスキルを持続的に高めて行かれることと確信しています。今後どのように、研究やビジネスを展開されている計画ですか。

「自分が一番初めに知る」体験を積み重ねて、チャレンジする

(須藤)

今お答えしている時期が博士 2 年の初めですので、残り 2 年の学生生活を悔いなく過ごすためにも、自分の「知りたい、やってみたい」という気持ちに正直に過ごしていこうと思っています。山口先生風に言えば、「モチベーションファクターに素直に従う」ですね。研究の方は自分が発見した新規材料について、よりメカニズムの部分を明らかにすることと、より良い性能を目指して改良・探索を行っていく予定です。それこそわからないことだらけなので困難には違いないと思いますが、「自分が一番初めに知る」という体験は僕にとってやはり心地良いです。

(山口)

開拓者としての活躍の姿が目に見えそうです。

(須藤)

そして、次の自分の「知りたい、やってみたい」は、「自分が発見した研究シーズをビジネスとしたときにどこまで行けるのか」です。こちらについてはまだまだ準備段階なので計画もまだ定まっていませんが、「やってみたい」としてしまったので仕方ありません。自分の全力をもってチャレンジしていこうと思います。

(山口)

そのために、どのようなスキルをどのようにさらに高めていきますか。

(須藤)

ビジネス化にあたって、これからは新たな人と関わるのが指数関数的に伸びそうだなと思っています。うまくいけば、研究室という比較的狭いコミュニティから飛び出して、先達のスタートアップの起業家の方や投資家の方とお話する機会も増えていくだろうし、やらなければならないことも増えていき、自分一人では手が回らなくなるでしょう。



(山口)

巻き込む相手の数も多様性も格段に高まりますね。

(須藤)

となればやはり独りよがりなビジネスにならないためにも、「合意形成力」や「巻き込み実践力」等のさらなる向上は必須だろうと考えています。合意を形成して投資を受け、メンバーを巻き込んで次のステージへ、、、山口先生の教えてくださったスキルを発揮する機会であふれています。

この先出会っていく様々なバックグラウンドの人たちを巻き込んで、ビジネス化し、自分の会社を経営できれば楽しいだろうと妄想しています。

(山口)

スキル発揮力を高めることは、何歳になっても、どのような高い職位についても、必要なことだと思います。同時に、発揮訓練は、早く始めるに越したことはないというのが、私の考えです。学生時代から多様なメンバーのモチベーションファクターを見極めて組み込み、巻き込む能力を高めてきた須藤さんの一層の活躍が、楽しみでなりません。

